

平成21年7月21日

軟庭今昔物語

第11号



期待の一年生

1年生女子



大高菜瑠美
綾歌中(前)

矢野瑞貴
丸東中(前)

三浦 彩
丸南中(前)

1年生男子



西岡拓也
飯山中(前)

山地史哉
附属中(後)

宮尾和樹
宇多津中(前)

1年生男子



梶谷優太
丸西中(後)

山地明日翔
附属中(前)

音石 武
宇多津中(後)

平場一樹
附属中(前)

2年生男子



多田有作

業天英範

武田明憲

三宅啓司

森井啓太

2年生男子



山地達也

白峰智大

山本博幹

物部優貴

3年生男子



大谷直之

石井照樹

中村大志

中村貴志

小野裕介

2年生女子



馬場しおり

高橋綾乃

近藤希映



佐久間智園

村上千晶

高島菜々美

3年生女子



川田 栞 関谷基香 西川沙季 中 萌子 橋本悠加



第10回
香川県高等学校冬季ソフトテニス大会
優勝 (20/12/26 丸亀体育館)
中・西川 組

第57回津島杯近県ソフトテニス大会
一般女子の部優勝 (21/5/3 坂出)
橋本・高島 組



顧問先生のご紹介

今澤 真子 先生

今年度高松西高校より赴任してまいりました。丸亀高校の第一印象は、校内のあちこちにその110余年の歴史が感じられるということです。そしてそれはこのソフトテニス部についても同じことが言え、30年以上も前にOBの方々から成る後援会が発足し、部の活動を陰になり日向になり支えて下さっているとのことで驚くとともに心強く思いました。OBの皆様方、今後ともよろしくお願い申し上げます。

さて、私自身のことですが、高校時代にバドミントンの経験はあるものの、残念ながらテニスについては全くの素人です。技術的指導は無理ですが、田村先生、関先生の助けとなるよう努力していきたいと思っています。

先日、県総体で躍動感あふれる高校生たちのプレーを見ました。チームメイトはもちろん、とりわけペアの人との信頼関係が不可欠な競技だなあと強く感じました。それと同時に、競技の激しさ、またゲームの面白さなど、素人の私にもその魅力が伝わってきました。本校の部員の皆さんには、よく整備された素晴らしいコートで日々仲間と練習に励めることを感謝しつつ、成長して行ってほしいと思っています。

また、今年インターハイ出場を決めた橋本・高島組には、今まで練習してきたこと、これまで支えてくれた周りの方々への感謝の思いを一球一球に込めて、悔いの残らない試合をしてきてほしいと思います。

戦後復興期

丸中から丸高へかけて その2

昭和27年卒 田万豊廣



軟庭今昔物語第7号で戦後復興期丸中から丸高へかけてその1（平成17年）を寄稿し、その後つついとい何年か経ってしまいました。今回は遅ればせながら、その2として、その後を続けたいと思います。

さて、その1では、コートの話・裸足の事・ユニフォーム・ラケットとそんな事ばかり書きましたので、いよいよ私のテニス人生について筆を止めたいと思います。

まず、何故私が軟式庭球に興味を持ち、テニスを始める事になったのか。私は小学生の頃には将来中学生になれば、剣道部に入部し、祖父や父のように多少とも名のある剣士になる事が夢でした。それが幸か不幸か日本の敗戦で、マッカーサー元帥の命令により、戦後剣道・柔道・空手など日本の武道が禁止となり、剣道にかわるスポーツを見つけられず、何かやりたいなあと思いつつ、中学2年生になるまで、どの部にも入っていませんでした。丁度その頃、父の持ち物の中に軟式庭球のラケットを見つけ、だまって持ち出して小学校の校庭で友達とラケットを振って遊んでいたところを父が見て、そのラケットを使ってよいから軟式庭球をやったらどうかと書いてくれました。

父曰く、テニスは剣道に通じる事が多い。その1 テニスは剣道と同じく道具を使ってやるスポーツ・その2 フットワークは剣道もテニスも足の捌き方が同じ。その3 剣道で大切な剣先の間合いとテニスのラケットとボールの距離感覚は同じだ。何だか私は父の言葉に心から納得して軟式庭球部に入部する事としました。時、2年生の3学期で、それが前にも書いたとおり現在までの私の長い長いテニス人生の始まりでした。（入部以来現在迄61年）

さて、テニスコートに行き、山上先生（顧問）に入部の申し込みに行ったところ心よく入部を許されました。

後日談として母から聞いたところでは、当時、学校では戦後予科練帰

と呼ばれる人達や、中には特攻帰りなど心に大きな痛手を負った人達が復学して来て、学内も社会も騒然としており、父は、自分達の学生時代と同じく子供にも早く打ち込めるスポーツをやらせたいという思いがあったそうです。

閑話休題、いよいよ部活の開始、その頃は特別に何時から何時まで練習するかは決まっておらず、放課後コートに行き、コートが空いていれば、だれかをつかまえて乱打の相手になってもらう。勿論、上級生が居ればコートを使ってよいか、又一緒に練習してよいかを聞いて、乱打の相手に迷惑をかけないようにボールを続ける事、相手をあまり走り回らせない事、その事に全神経を集中して、先輩達に追いつくために、心を込め、丁寧に丁寧に一生懸命練習しました。家に帰っても、家の塀の壁を相手に壁打ちを、球をコントロール出来る迄しっかりやりました。ラリーが少し続くようになると選手の練習試合に入れてもらいました。選手の人達はコートに来ると初めから帰る迄ゲームばかりしていました。

ゲームに入れてもらえる頃からテニスの「イロハ」について香川コーチから色々話を聞く事が出来るようになりました。

あまりに熱心にやるものだから、入部して3～4ヶ月後に生まれて初めて対外試合に同行する事となりました。1年上級生の塩井さん(故人)の前衛として坂出工業高校の選手と生まれて初めて他流試合をしました。

前衛ですからボールに触らなければミスはしませんが、いよいよレシーブの時は絶体絶命、今でもあの時の緊張を忘れる事はありません。足にも手にも力が入りカチンカチン、息まで上がって手が震えました。兎に角必死で相手のコートにボールを返す事が出来ました。結果は塩井選手の頑張りで何とか勝つ事が出来ました。後で相手チームは坂出工業高校のキャプテンチームだったと聞かされて、大きな自信を得る事が出来ました。それは香川コーチから、テニスはミスが少ない方が勝つと言っていたのを聞いて、ミスをしない事を実行した結果だったので、この教訓は私の心の中に今でも大きく残っています。

中学3年生になると本格的に部活が始まりました。私にとって画期的な出来事は、丁度同級生に永山賢二君が居た事でした。永山君はすでに2年生の時に頭角を現し、県下でも注目を集めつつある選手でした。山上先生は永山選手に目をつけ、何とか強い選手にしたいと思い、香川コーチに指

導をたのんで来てもらう事になりました。それ迄は田中先輩のお父さんの吉田コーチがもっぱら指導しておられましたが、香川コーチが来るようになってから吉田コーチは女子の方を指導される事になり、松本選手・神原選手・木村選手と多くの選手を育てられました。

永山君は香川コーチの指導の下、ぐんぐん腕を上げ、すぐに県下の有力選手となりました。私はと言うと3年生の春の県の高校選手権大会に第3シードか第4シードだった尽誠学園の三谷・ 組と3回戦(当方バックシン)で合い、ファイナルの接戦となり惜敗した事で、応援に来てくれていた人達からよくやったと誉められ、何とか順調に選手生活がスタートしました。とは言え、私はテニスを始めて半年も経っていないだけに、ラリーはどのように続けられるようになったが、バックは打てず、レシーブはやつと返球し、ボレーは自分の守備範囲の端の方に寄ってしっかり守るだけと言った状態で、本当にたよらないものでした。

しかし、短い期間にそこまで努力した事と、将来の高校1年生チームを作ると言う事で、一度永山選手と組まして見るかとなり、永山・田万組が誕生する事になりました。しかし、大事な試合には永山君は上級生の大林さんとか橋本さんと組んで出場し、西日本大会の香川予選では中学3年の永山君が橋本さんと組んで優勝し、戦後の県下の大会で丸高の初優勝を勝ち取りました。しかし、いかに丸亀高校併設中学校生とは言え、県の試合ならいざ知らず、西日本大会に中学生は出場出来ないだろうとの高体連の判断で、結局上級生の西原さんと橋本さんが組んで西日本大会に出場する事になりました。永山君と私は、褒美と将来の勉強の為と言う事で大阪迄連れて行ってもらいました。当時、米は配給でしたので、自分の食い扶持分の米を持って行きました。その荷物の重い事、肩が抜けそうで、今でも鮮明に覚えています。そんな事を繰り返しながら、だんだんと永山・田万組となる事が多くなりました。

中学3年生の夏、新居浜近県大会では、愛媛の高校チャンピオンに3:0の3:2まで負けていたのを手も足も声も震えながら必死の気力で逆転勝ちをしたり、又夏の県の大会では、第1シードの高松高校小比賀・吉田組(高校3年生)にファイナルで負け、秋の大会も同様の惜敗で、この時は悔しくて悔しくて、帰り道、三越あたりから高松駅まで歩きながら、たまらず泣けて、泣けて涙が止まりませんでした。山上先生に良くやった、次

に頑張ればいいと慰められると、ますます泣けて来た事を思い出します。しかし、テニスで泣いたのは、後にも先にもこれが初めの終わりでした。

いよいよ高校1年生、その時にはチームとして永山・田万組が定着し、その頃は、私も多少は成長し、少なくとも永山君の足を引っ張るようなテニスをしない事を心がけました。お陰で高校生になってからは、1年生・2年生を通して県下の高校の試合は全て勝つ事が出来ました。

永山・田万組となつての思い出としては、神戸で開催された西日本大会において、当時高校で不敗の三重県木本高校の松田・鳥井組との一戦です。松田・鳥井組とは3回戦（私達はパッキン）で当り、ファイナルの勝負となりました。レシーブのゲームで、香川コーチから攻めろとの指示で、永山君が鳥井選手アタック、田万がアタック、永山君アタック、田万アタック、どれもしっかりしたアタックでしたが、4本共測ったようにベースラインのセンターマーク近くにボレーを決められ、これには心から感心しました。そして、この教訓は、ファイナルになる迄は永山君独特の、つなぐテニスで松田選手と互角に打ち合って戦ったわけで、そのテニスを続ければ勝機があったかも知れず、しかしこんな緊張の中、香川コーチの指示通りのボールが打てた事に満足感をおぼえました。

余談ですが、この試合中に、それまで2ゲームと他のチームにやった事のない松田・鳥井組が、香川の田舎の1年生チームに喰いつかれて接戦していると言う事で、試合の観客席が一杯になり、しかも本来なら子供のチームに応援が多いと思うのに、馴染みがあるからか、それとも自分達のチャンピオンチームがこんな小僧に負けてなるものかと思うのか、香川県の関係者以外全員が松田・鳥井組の応援団となつて、それが反って私達の闘志に火がつき、負けはしたが、今でも思い出すと快い興奮がよみがえります。

全日本大会は東京であり、勇んで上京しましたが、試合出場の直前になり、山上先生が試合には裸足で出場出来ないと大会本部が言っていると聞いてこれ、と言っても運動靴はどこにも売っておらず、永山君のお母さんがあちこち手配してやっとズックを1足手に入れてくれました。これを永山君と私が片方ずつ履いて何とか出場する事が出来ました。今では考えられない事ですよ。

さて、この大会でも忘れられないドラマがありました。第1シードは

松田・鳥井組ですが、第2シードは松田・鳥井組以外には負けた事がないと言う東日本のチャンピオンチーム栃木県の木島・南方組と3回戦（永山・田万組はバッキン）で対戦し、今度は見事4：0で快勝、大会後の軟庭連発行の雑誌には、全日本大会の戦評の中、特に香川県の永山組の活躍は素晴らしかったと特記されていました。田万の名が無かったのは、やはり見る人は見ていると納得しました。山上先生は丸亀に帰ってからも事あるごとに、その雑誌を皆に見せていました。この試合を振り返りますと、永山君と相手の後衛木島氏がラリーを続け、名前衛と言われていた南方氏がモーションをとって狙いすまして動くと、永山君の打球がスーと南方君の横を抜けて通る。動かないと木島氏とのラリーがいつまでも続く、今度こそと南方氏がボレーに出るとストツかわされる。試合の途中で南方選手がかわされ、得点されるたびに頭をひねっていたのが、今でも目に浮かびます。永山君の打球はクロスボールと流すボールとでフォームが全然変わらず、打球時点で少し前で打つか、遅らすかでコースが変わり、前衛泣かせの天才でした。香川コーチも折り紙をつけていました。しかもコントロールが抜群だったので、ラリーミスが本当に少なく、永山君と試合をした相手は、又あのチビにやられたと言っていました。それでは永山君の弱点はどこにあったのか？それは足でした。小さいので走らされると、だんだん草臥れて来て、最後には足が纏れて来ます。ですから私の役目は何とか永山君が走らされないようにする事でした。とうとう一日目の最終戦、夕暮れのコート決勝で兵庫県のチームにロビングを多用せられて足が動かなくなり敗れてしまいました。もう少し早く日が暮れていて翌日の試合だったらなあ、と香川コーチも残念がっていました。

その東京大会のコートは春日町の中央大学のコートで、後年、このコートで練習するようになるとは夢にも思いませんでした。



昭和24年丸亀高校国体選手団
 (ソフトボール・陸上・体操・軟式庭球)

さて、その年の国体は東京であり、神宮での開会式は盛大で、生まれて初めての大きくて華やかなものでした。国体では記憶に残る戦績は残してないと思います。当時は現在のような団体戦でなく、県から男子2チーム・女子2チームが出場する事が出来、男子2チームの内、丸高からは永山・田万組、女子2チームの内、丸高から松本・神原組が出場しました。

ここで私にとって大きな出来事がありました。丸高の星、永山君がお父さんの転勤のため東京に転校することになった事でした。晴天の霹靂です。永山君と別れる事は仕方ありませんが、1年間香川県で不敗を続けたわけですから、永山君が居なくなったので負けたと言うわけにはいきません。しかしながら、何しろ永山君の存在が余りにも大きかったので途方に暮れました。

しかし、ぐずぐずしているわけにはいきません。そして新しいチームが決まりました。1年上級生の林(現高木)さんとチームを組むことになりました。林さんは今でもそうですが、性格は勝負師、勝負師は勝っている時は素晴らしいプレーをしますが、形勢不利となると予想以上に弱気になるので、私の役目は絶対自信満々を演出する事です。大した腕でない私で

すが、1年間県内で常勝チームの前衛だとの、暗示を林さんにも自分にも、しっかり懸けて頑張りました。見事成功、2年生になって永山君抜きでも無敗を通しました。林さんもよくプレッシャーを跳ね除け頑張りました。

その間に林さんの同級生・私の同級生がグングン腕をあげて来ました。丸高軟式庭球部が戦後の黄金時代と言われたのも、この頃の事です。

林さんとチームを組んで思い出に残る試合は広島で行われた西日本大会でした。私は1年生の時にそれなりの成績をあげたつもりでしたが、永山君の抜けたチームは、やはり弱小扱いで、3回戦で第2シードと対戦する(俗にパッキン)ところでした。相手は兵庫県の強豪六島・川口組。3：0の3：0まで追い込まれ、ここで私が頑張らなければ、誰が頑張るんだと、むくむくとファイトが湧いて来ました。それから奇跡の逆転勝利、これは自分でもこんな事がこの世にはあるのだなあ、と今でも思っています。何と、私は相手の打球の1本目を16球続けて抑えきり勝ったのです。あの時は、相手の1球目がどこに来るのか。相手の心理状態を読む事と思い切り、しかし続けて得点し続けると、だんだん次は読み違えではないか、次はミスをしなやかと段々思えて来て、思い切りが悪くなって来ます。相手だって一流選手ですから逃げようとする、アタックは来る、ロビングを上げようとする、しかし今考えると相手は一流だけに完全に私の波長に合ったんですね。この大会ではベスト4で涙を吞みましたが、大会名の入ったスポーツタオルを賞品にもらって意気揚々と帰校しました。

後日、ある人から聞いた話ですが、女子の監督として一緒に来ていた和泉先生(後年丸高の校長先生となられた)が大感激して、土壇場になっての粘りと精神力はすごいと遠征から帰った1時間目の授業中、授業をせず、その挽回の様子を熱心に話されたそうです。本人の知らぬ間に有名人になっていたようですが、女子の校舎は今の西中にあり、私は卒業以後も知りませんでした。

その年の国体は愛知県であり、丸高からは男子は林・田万組、広瀬・塩井組と県代表は丸高が独占、女子は松本・木村組が出場し、県代表4チームの内3チームを丸高が占めました。



昭和25年度丸亀高校国体選手団

(陸上・体操・軟式庭球)



昭和25年 冬 丸亀高校軟式庭球部合同写真

私は3年生の時、林さんの卒業を機会に試合出場を止め、進学の準備に入りました。にも関わらず1年浪人、3年生まで選手生活を続けた同級生はほとんど現役入学しました。私が安心して選手を止めたのは、同級生が皆、立派に腕をあげたからです。その証拠には、その年の四国選手権（第1回）の優勝者は、前年副将だった廣瀬・大西組でした。その他何チームもの同級生が全国大会に出場し、一番早く負けたチームでも3回戦には進出したそうです。その出場チーム数は確か5チームと聞いています。



昭和26年 秋 丸亀高校軟式庭球部合同写真
(廣瀬・大西組 四国高校選手権優勝記念)

現役の方、大学入試にも、現役入学や浪人入学色々ありますが、熱心にある事に打ち込んだ人間は必ず立派な社会人になっています。

在学中は勉強に部活に思い切り青春の情熱を燃やして下さい。

今回の投稿はこれで終わりたいと思いますが、次回は山上先生・香川コーチ等々について書いてみようかと思っていますから、興味のある方々はご期待下さい。

第49回香川県高校総体を終えて

s 36年卒 林 紘史

今年は6月6日から8日、男女とも生島の県総合運動公園テニス場にて開催された。3年生にとっては高校時代最後のマッチになるかも知れない大会である。その3年生男子は石井照樹・大谷直之・小野裕介・中村大志・中村貴志、女子は川田栞・関谷基香・中 萌子・西川沙季・橋本悠加選手達10名である。皆、仲良く、楽しそうに、好く練習をするテニス大好き人間であった。特に、昨年夏以降後衛から前衛に転向した石井、高校に入学して初めてラケットを握った関谷、よくぞここまで上達してくれた、とその努力に賞賛を送りたい。

また、昨年度四国大会個人戦に出場した中・西川ペア、今年度は惜しいところで敗退、残念であった。しかし、橋本・高島ペアがベスト8入賞、8月5日から奈良県明日香村で開催の全国大会への出場権を獲得した。何年ぶりになるのであろうか、とにかく嬉しく頼もしい限りである。関先生の情熱の下、最後まで諦めずにひたむきにプレーに徹した賜物だと信じて疑いません。応援には行けないが、丸高生らしい、ひたむきな・どんよくな・ねばり強いプレーを期待してやみません。

平成21年度 総体を終えて(男子の部)

顧問 田村静夫

田万・林両先輩をはじめ、後援会の皆様方には、常日頃から物心両面にソフトテニス部後輩たちを御支援くださり誠にありがとうございます。今年の総体の報告をいたしたいと思います。

団体戦、エントリーチーム数は26。持ち点からいくと、高松、坂出とならんで第八シードとなるが、くじ引きの結果第八シードは高松となり、本校はベストエイト決めて第2シードの寒川高校と当たることになった。

一回戦は、対戦相手は藤井高校で、3対0で勝ち。2回戦は寒川高校。寒川は昨年の新人戦でベスト16が4チームあり、(今年の春の国体予選では16が一本、32が3本)その中の一つは昨年の夏季大会で第4シードの尽誠をやぶったこともあり、力のあるチームなのでそこを避ければなんとかなると、本校の3・1・2と出したところ相手は予想通り1・2・3と出てきたのでオーダーとしては当たった。

第一試合は森井・石井組、1・2ゲームは簡単に取られたが気持ちは前向き。3ゲーム目はジュースとなり、何度もマッチを取るが前衛がレシーブミスを連発してこのゲームを失う。後は簡単に取られて0・4で負け。

第二試合は三宅・武田組、1ゲーム目の1・2ポイント、単純なボレーを前衛がミス。1ゲーム目を簡単に取られるが、2ゲーム目3ゲーム目はせりあい、勝機はあるかと思われたが力及ばず、結局このチームも0・4で負け。団体戦は終わった。

勝敗はついてしたが、第三試合も行われ、小野・中村大組もよく戦ったが結果は1・4で負け、三敗となった。

個人戦は、キャプテンチームの小野・中村大組が良いゾーンにいたので多度津工業と四国大会をかけて争うはずであった、が、伏兵、寒川の2年生チームに2・4で敗れてベスト64に終わった。

三宅・武田組はベスト32決めの対戦相手が、第8シード、尽誠の藤本・高杉組で、高い壁であったが、ゲームカウント2・3と挽回し、6ゲーム目も3・2とマッチポイントを握った、が、アタックに近い短いボールを前衛がボレーしたものの、コースが甘く、フォローされてそのポイン

トを取られ、チュース。 その後は簡単にと取られて終わった。ただ、その藤本・高杉組は結果的には準優勝し、そのチームから2ゲームを奪ったのは三宅・武田組だけだったので良く戦ったと言えよう。(このチームは四国大会でも第三位になっている。)

新チーム(2年 8名、1年 7名)で練習している現在、小野・中村大組に匹敵するチームがおらず、新チームを組む前に、個人の力量を高め、いかにミスの少ないテニスをするかに力点を置いて練習している。女子が久しぶりにインターハイ出場を決めたので、来年は男子がそれに続くべくがんばっている。先輩方もコートに足をお運びくださり、練習をつけてやってくださることを期待しております。

平成20年度 男子戦績

8月14日	亀城杯近県大会(団体戦)	予選リーグ5チーム中4位	
8月25日	夏季大会	小野・中村大組	ベスト32
11月2日	新人戦(個人)	小野・中村大組	ベスト32
		三宅・武田組	ベスト64
		大谷・物部組	ベスト64
		森井・石井組	ベスト64
11月9日	新人戦(団体戦)	一回戦 対藤井	3 - 0勝ち
		二回戦 対高瀬	3 - 0負け
12月23日	冬季インドア大会(36チーム)		
		小野・中村大組	ベスト16
		三宅・武田組	ベスト32
1月25日	市内インドア大会		
		小野・中村大組	0 - 4 福田亮・晴被(四電・亀城)【ベスト4】
3月20日	県B級大会(93チーム)		
		三宅・武田組	ベスト8
		小野・中村大組	ベスト16
		大谷・物部組	ベスト32
3月21日	県A級大会(18チーム)		

三宅・武田組 3 - 4 杉崎・中西組 (城西)【ベスト8】

4月18日	県国体予選 (153チーム)		
		小野・中村大組	ベスト32
		三宅・武田組	ベスト64
		大谷・物部組	ベスト64
5月10日	暁星杯 (78チーム)		
		小野・中村大組	ベスト16
		三宅・武田組	ベスト16
6月6日	県総体 (団体戦26チーム)		
		丸亀 0 - 3 寒川	【16位】
6月8日	県総体 (個人戦201チーム)		
		小野・中村大組	ベスト64
		三宅・武田組	ベスト64
			以上

総体記

顧問 関 直樹

平成21年度の県総体は、天候に恵まれた6月6日(土)から8日(月)にかけて、県営テニスコートで実施された。最後の総体となる3年生は新人戦以後、毎日の朝練、放課後の練習に汗を流してきた。その集大成ともいえる総体への意気込みは、団体会で四国大会、個人戦ではインターハイ出場と並々ならぬものであった。

6日の団体会戦、最初の相手は創部間もない寒川高校。1番手に中・西川組、2番手に橋本・高島組、3番手に川田・関谷組の布陣で臨んだ。結果は4-1、4-2、4-1の3-0で勝利しベスト8に進出。

四国大会出場をかけた3回戦は、今年も昨年同様に 尽誠学園との対戦となった。1番手は中・西川組対高野・伊加組。立ち上がりは0-4で落としたが、その後のサービスゲームをキープしゲームカウント2-2と粘った。しかし、5、6ゲームを落とし2-4で敗退した。

2番手は橋本・高島組対小林・佐藤組。尽誠の小林は1年生ながらサーブ、ストロークが安定し、要所要所でコーナーを厳しく攻められ、結果は0-4で敗れ、団体会で四国大会への出場はかなわなかった。

7日からの個人戦では、全員が2回戦突破で8日の試合に臨むべく頑張った。1年生ペアの三浦・大高組は1回戦からの出場で飯山高校に2-4、2回戦から出場の馬場・近藤組は津田高校に0-4、高橋・矢野組も三本松高校に1-4で敗退した。2年生で気を吐いたのが、佐久間・村上組だ。坂出高校の尾上・小池組に臆することなく攻め続け、4-2と競り勝ち3回戦に駒を進めた。中・西川組、橋本・高島組も順当に2回戦を突破し、翌日の3回戦進出を決めた。

最後の総体となった3年生ペアの川田・関谷組は高松一高の川口・竹内組との対戦。相手後衛の粘り強いストロークに対して、川田のシュートや関谷のボレーで対抗し、ゲームカウント3-2、第6ゲーム4-3とマッチポイントを握ったが、このゲームを落としファイナルへ突入。先行され追いつくという厳しい展開の中、5-5まで粘ったが5-7で落とし、彼女たちの総体は終わった。

高校からソフトテニスをはじめた関谷は、そのハンデを克服すべく毎日熱心に練習し、部長としてもチームを引っ張った。

川田は3年間で一番の伸びを見せた選手だ。毎朝、1人でも黙々とサーブの練習に取り組み、コートには常に彼女の姿があった。ゲーム後に泣きじゃくる彼女たちにかける言葉が見つからない。苦い初日となった。

翌日も天候は晴れ。3回戦突破を目指し残り3組の戦いが始まった。

佐久間・村上組は尽誠学園の楠岡・上田組、立ち上がりから硬さが見られミスが続いた。0 - 3からの4ゲーム目、1 - 3から粘って4連続ポイントでこのゲームを奪い、いい流れとなりつつあったが0 - 4でゲームを落とし、4回戦進出とはならなかった。しかし、二人ともこの1年間の練習の成果を十分に発揮した2日間だったと思う。さらなる精進を期待したい。

中・西川組は英明高校の横井・馬場組と対戦。中の積極的な攻撃もあり3 - 2とリードして迎えた第6ゲームを2 - 4で奪われ、ファイナルへ入った。白熱したゲームで5 - 5となったが、連続でポイントを奪われ、5 - 7で敗退した。堅実で、絶対あきらめずにボールに食らいつづ中の姿は、後衛としての手本を丸高ソフトテニス部に残してくれた。ペアを組んだ西川も、チャンスでは気合いのこもったプレーが随所に見られた。昨年度の四国大会のリベンジを願っていただけに残念である。

インターハイ出場に期待のかかる橋本・高島組は、3回戦の志度高校を4 - 0で退け、四国大会のかかった4回戦、津田高校の朝倉・石塚組との対戦を迎えた。国体予選からペアを変えてきた津田高に対し、橋本のシュート、高島のボレーが効果的に決まり、結果4 - 2で四国大会への出場を決めた。5回戦の相手は第4シードの英明高校、横川・遠藤組。昨年の新人戦では3 - 4で敗れた相手である。これに勝てばインターハイ出場となる大事な試合、立ち上がりから橋本の積極的な攻撃が実り6 - 4で第1ゲームを奪った。その後、2ゲームずつを取り合い迎えた第6ゲーム、3 - 2とマッチポイントを握りそのまま押し切るかと思われたが、この後3ポイント連続で奪われファイナルゲームとなった。ファイナルの立ち上がり2 - 0のリードから2 - 2とされたが、ここから橋本のシュート、高島のスマッシュが炸裂、4 - 2とするとベンチ・部員も一気押せ押せムードとなり、気迫のこもった高島のボレーが2回相手コートに吸い込まれ、終わってみれば7 - 4でファイナルを取り、念願のインターハイ出場を決めた。

準々決勝の相手は、6日の団体戦で対戦した尽誠学園の小林・佐藤組。立ち上がりから3ゲームを奪われたが、4ゲーム目を2 - 4で奪い返し、ゲームカウント1 - 3とした後の第5ゲーム、小林のシュートが決まりこのゲームを落とした。橋本は3年生になり入学時よりストロークに安定感が備わり、また2年の高島を積極的にリードできた。高島も、気迫のこもったプレーを随所で見せ、二人で1本取る姿勢を持ち続けたことが今回の結果につながったと思う。心からインターハイ出場を祝福したい。

さて、県総体を終えた今思うことは、橋本・高島組のインターハイ出場は、今年のチーム丸高全員の手で掴んだ大きい成果だということです。選手はもちろんのこと、お互い切磋琢磨し協力し合う部員の存在、選手の勝利のために熱心なご指導やアドバイスをいただいたコーチの方々、特に冨家さんの存在は選手にとって大きく、精神的なよりどころでもありました。

また、選手を物心両面から支えていただいた保護者や後援会の皆様、これらすべての力が集結し、喜びの瞬間を6月8日に生島コートで味わうことができました。

インターハイ出場を3年生は我が事のように喜び、1・2年生は誇らしく思い、その興奮は今も冷めることはありません。橋本・高島組は奢ることなく、感謝の気持ちを忘れず、香川県の代表として、また丸亀高校の代表として奈良県での試合に臨んでもらいたいと思います。

最後に、後援会の皆様方に顧問として5年目で全国大会に生徒を送るという報告ができることは嬉しい限りです。今日まで多大のご協力をいただきながらご期待に添えるご報告ができませんでしたが、今年は丸高ソフトテニス部に新たな1ページを刻むことができる喜びをご報告させていただきます。この結果に満足せず、さらなる向上を目指して今後も指導をしていきたいと考えておりますので、ご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。ありがとうございました。

